
猫に恋して

結木しぐさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫に恋して

【Nコード】

N8462T

【作者名】

結木しぐさ

【あらすじ】

わたしには秘密がある。誰にも言えない秘密。だって言ったら馬鹿にされるから。冗談でしょ？って笑われるから。わたしの秘密。わたしは猫に恋してる。

わたしと秘密（前書き）

よく分からない感じの話。

わたしと秘密

「真子ちゃんって好きな人いないの？」

女の子って基本的に恋の話が好き。

休み時間、放課後、ちょっとした空き時間。何かとそういう話題になることが多い。

片思いしている子が好きな人の話をはじめればワーキヤー騒いで、彼氏がいる子が彼の話をはじめれば惚気ないでよと言う。

話をしている本人はちよっぴり恥ずかしそうに頬を染めて、最初は嫌がってる子もそのうち満更でもなくなる。

そして、その話の中に自分の好きな人を打ち明けていない子がいれば必ず好きな人いないの？ってきいてくる。

「うーん、今のところいないかな？」

そういう質問をされるたび、わたしは笑ってごまかす。

本当はいる。

でも言えない。言ったら馬鹿にされるから。

冗談でしょ？なんて言ってみんな笑うから。

わたしの好きな人。

好きな人っていうのも可笑しいのかもしれない。

わたしが好きなのは猫だから……

“猫が好き”

そう言ったら人は必ずペットとして猫が好きなんだと想像する。

だって、それ以外に考えようがないから。

だれも猫に恋しているなんて思わない。

猫が好みの好きが恋としての好きだなんて思わない。

だってそんなことあるはずないから。

あるはずがないって誰が決めたんだろう？

猫に恋しちゃいけないって誰が決めたんだろう？

わたしは誰が何と言おうが猫が好きなのに。

「ただいま、シキ」

家に帰ると、わたしは真っ先にあの子を抱きしめる。

グレーの毛並みに青い瞳。

わたしが帰ってくると必ず玄関で待っていてくれるこの子を愛し
いとわたしは思う。

「ミャー」

シキがおかえりと言ってくれる。

ペロリと舐められた頬が熱い。

わたしの腕の中の温もりがこれ以上なく愛しい。

「ご飯のしたくしよっか？」

そういえば、シキは可愛く答えてくれる。

シキが好き。

大好き。

シキといるとドキドキする。

他の人には感じないトキメキをシキの隣で感じる。

誰にも言えない秘密。

誰にも理解されなくていい。

わたしは猫に恋してる。

わたしと秘密(後書き)

「大好きよシキ」

そう言って抱きしめてくれる君に、俺は何も返せない。

【ちょみつとあとがき】

わたしが中学1年生の頃に書いた話です。
ホンの少し手直しして載せてみました。
幼さが出て……ますかね？

わたしと出会い

わたしがシキに出会ったのは3年くらい前のこと。

雨の日だった。

とってもベタな出会いだったと思う。

漫画の展開で言うなら、同じ本を取ろうとして手がぶつかるとか、そのくらいベタな出会い。

雨の日午後。売却地の端に置かれたダンボールの中。

強い雨に打たれながらも、決して弱みを見せず鳴くこともせず、シキはそこにいた。

「……お前も捨てられたの？」

ダンボールのそばにしゃがんで問えばシキはその青くキレイな瞳をこちらに向けた。

「わたしと一緒にだね」

そういえば、シキはミャーと小さく鳴く。

そのことに思わず笑顔がもれた。

「おいで、一人者同士一緒にいようよ」

そう言って、抱き上げたシキの体は雨に濡れて冷たかったけど、どこか温もりがあった。

生きてるんだなとその時わたしは実感した。
この子も生きてて、わたしも生きてるんだと実感した。

家にシキを連れて帰ったらまずシャワーを浴びせてあげた。

「お前、オスなんだ」

シキを洗ってる途中、ちょっと抱っこして確認してみるとオスだと発覚。

「ミャー」

「はいはい、ちゃんと洗えって？」

シキはちょっとわがままで、でもそれが逆に心地よかった。
必要とされてるみたいで、嬉しかったんだ。

お風呂を出た後、シキを乾かしてあげた。

「キレイな目してるんだね」

シキの目は、外でみるよりもずっとずっときれいだった。
青くすんだ瞳がこちらを見て、ミャーとなく。

そしてわたしに擦り寄ってきた。

「名前、何にしようか？」

シキを抱き上げながら聞く。

「お前、名前あるの？」

「ミヤー」

「ミヤーじゃ分かんないよ」

わたしは小さく笑った。

「わたしが名前決めてもいい？」

「ミヤー」

わたしはちよつとだけ考えて、すぐに思いついた。

「じゃあシキにしようか？」

「ミヤー」

わたしはそう言ってシキを抱きしめる。

「わたしがもし男の子だったらシキって名前にしようと思ってたんだって。いい名前でしょ？」

「ミヤー」

「これからよろしくね、シキ」

それは小さな出会い。

そして大きな出会い。

これは、わたしがまだシキに恋する前の話。

わたしと出会い（後書き）

抱きしめられた瞬間感じた君の熱が心地よかった。

生きてるんだと実感した。

俺も君も生きてるんだと……

わたしと日常

シキと出会ってから、わたしの生活はちょっとした変化を見せた。

「ん……おはようシキ」

わたしは家の中で挨拶をするようになった。

「ミャー」

それから、その挨拶に答えが返ってくるようになった。

「よしっ、朝ごはん作るからちよっと待っててね」

「ミャー」

誰かのために、ご飯を作るようになった。

自分のご飯も前見たくコンビニで買わなくなった。

「ミャーミャー」

「そんなに焦らせないでよ」

朝が慌しくなった。

でも、それが心地よかった。

学校に行くのが少し嫌になった。

シキともっと一緒にいたいと思ったから。

でもそれをシキに言うと、シキは怒ったように鳴いてわたしのかばんを玄関まで引っ張るから……

そんなシキを見てると学校にいかなくちゃって思えるようになった。

今でもたまに学校に行きたくないと言うけど、それはわたしのかばんを小さな体で一生懸命引っ張るシキがあんまりにも可愛くて言ってるということは秘密だ。

そうそうそれから

「真子ちゃん最近明るくなったね」

そういわれることが多くなった。

自分でも、少し明るくなったなと思うときがある。

笑顔の数が増えた。

成績も上がった。

シキと出会ってから、いいことばかりだ。

「ただいま、シキ」

「ミャー」

家に帰ったら、真っ先にシキを抱き上げる。

「聞いて？あのねわたしの出した作品が入選したんだって！」

美術部に入っていたけど、実力はからっきしで先生からもほっと

かれていたわたしの作品が入選した。他の子はもっとすごい賞をとっていたけど、今までかすりもしなかったわたしの作品が入選したことがわたしは嬉しかった。

「ミャー、ミャー」

「ありがとシキ。今日の夕飯豪華にしようね！」
「ミャー」

すべてシキのおかげ。

シキがいたから頑張れた。

そうしていつの間にか、自分でも気づかないうちに、わたしはシキなしでは生きられなくなっていた。

わたしと日常（後書き）

君が俺の全てだから

俺もいつの間にか君なしでは生きられなくなっていた

わたしと行方不明

「シキ………？」

シキとの生活がはじまってもうすぐ半年になろうとしていたときのことだ。

その日はいつもと違った。

朝目が覚めたとき、シキはいなかった。

「シキ？ シキ………どこ？」

そんなに広くない部屋を隅々まで探したけど、シキはいなかった。

「シキ！ どこにいるの？ シキ！」

ドアに鍵はかかっているし、窓だって開いてない。

シキはどこにもいけないはずなのに、いない。

シキがいなくなってしまった。

シキがいらない？

またひとりぼっち………？

なんとも言えない恐怖がわたしを襲い、わたしはその場に立ち尽くしてしまった。

シキがいなくなったらわたしはどうすればいいのだろうか？

寂しい。

辛い。

絶えられない。

一人は嫌だ。

「シキ……」

そのときだった。

「ミャー」

愛しい声が後ろから聞こえたんだ。

「シキ!!」

振り返ればグレーの毛並みに青の瞳。

そこにいるのは間違いなくシキだった。

「シキ!どこ行ってたの」

駆け寄って抱きしめれば、シキは小さくなくて擦り寄ってきた。

温かな温もりにやっとな安心できる。

「シキのばかぁ」

無意識に流れていた涙をシキの小さな下がペロリと舐めてくれた。

「どこにも行かないでよシキ……」

「……ミャー」

結局シキはベットと壁の隙間に落ちてそこに寝ていただけだった。

「シキーわたしシキがいないと駄目なんだからどこにも行かない
でよ」

「ミャー」

「分かってんのかな？」

シキを抱っこしたままゴロンと転がる。

「シキ、大好きだよ」

そう言ってその鼻先にキスをした。

わたしと行方不明（後書き）

君を悲しませたくない

どこにも行かないよ

だから笑って？

わたしとはじまり

いつから好きだったか？
そんなのよく分からない。

普通の人間の恋もそういうことが多いと聞いた。

気がついたら好きだった。

いつの間にか好きになっていた。

友達の会話の中にチラホラ出てくる言葉だ。

でもやっぱり好きだって気がつくきっかけがあるわけで……
わたしの場合はとても些細なことだった。

朝目がさめたとき。

びっくりするほど近くにあったシキの顔。

わたしの唇とシキの鼻先が触れそうなほどに近くて、わたしは思
わず顔引いた。

熱くなった頬はきっと赤いことだろう。

そのときフツと思ったんだ。

どうしてわたしは赤くなっているんだろうって……

シキは猫なのに……

わたしは人間なのに……

ドキドキするわたしの視線は思わずシキの鼻先に向いて、わたしはソツと自分の唇を近づけてみた。

ちゅ

軽いキス。

キスとも言わないのかもしれない。

それくらいなんてことない行為。

そんな行為が恥ずかしくて幸せで、シキが愛しくて

「そっか……」

好きって感情がどんなものなのか分からないけど

どうしてかな？

これが恋なんじゃないかってそう思ったんだ。

それがわたしの恋のはじまり。

可笑しいって言われようが、気持ち悪いって言われようがわたしはシキが好きで……

勘違いだって言われても、やっぱりこの感情はわたしにとっての恋で……

やっぱりわたしはシキが好き。

わたしとはじまり（後書き）

微かに触れた君の唇は柔らかくて……

この感情を何て呼ぶんだろうか？

わたしとシキ

「真子ちゃんってさ好きな人いないの？」

お決まりの台詞。

「うーん、いまのところいないかな？」

それに返すわたしの言葉も同じ。

誰にも言わない。

誰にも理解されなくて良い。

「シキー、ただいま」

シキを抱きしめてほっとする。

「ミヤー」

シキの鳴く声に癒される。

「ちょ、シキくすぐりたいよお」

シキに舐められてトキメク。

「おかえし」

シキにキスをして、熱くなる。

きっと、誰もこんな気持ちを理解できたりしない。

でも、わたしにしてみれば人に恋するあの子たちの気持ちが分からない。

人に恋するあの子達は、いつもどこか暗い影を背負っている。

幸せだけではないと、よく分かる。

でもシキに恋しているわたしの世界は幸せでいっぱいだ。

嘘。

時折、少しだけ寂しさを感じることはある。

でも、それを補うほどの優しさをシキはくれる。

人の男よりも、シキの方がずっと優しいし、ずっと素敵だ。

「シキ、大好き」

そう言えば、シキはペロリと頬を舐めてくれる。

シキが好き。

きっとシキもわたしのことを好きでいてくれるはず。

確信はないけど、いつもそう思っている。

だってそうじゃなかったら、シキはずっとココにはいてくれてないはずでしょ？

逃げようと思えば、シキはいつでも逃げられる。

逃げられるようにわたしがしているから。

でも逃げない。

シキはわたしのそばにいてくれる。

それってシキがわたしのことを好きってことでしょ？

なーんて

ただの自惚れにすぎない。

シキはわたしがご飯をくれからここにいただけかもしれない。

一人ぼっちのわたしに同情してそばにいてくれるだけかもしれない。

だって、シキは優しいから……

でも、いいの。

それでもいいの。

好きだから、そばにいられるならなんでもいい。

シキ、好き。

大好き。

願わくば、貴方もわたしのことを好きでいてくれますように……

わたしとシキ（後書き）

きっと君が俺を好きだと思うのは、ずっと一人だったから。

君は、君のそばにずっといる俺を好きだと勘違いしているだけ。

いつか君は、本当の恋を見つけるだろう。

人の男と恋に落ち、俺のことを見放すだろう。

それでも、君が幸せならそれでいい。

願わくば、どうかそのときまで俺を一番そばにおいて……

【あとがき】

猫に恋して、これにて完結です。

すっきりしない終わり方でごめんなさい。

納得いかない点が多くあるとおもいます。

これは、とある少女のある一時の感情を書きたかった作品です。
ふーんと思って読んでいただければ結構です。

とにかく、よく分けの分からない話だったことでしよう。
こんな話を読んで下さりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462t/>

猫に恋して

2011年8月4日17時20分発行